

令和4年6月26日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202180059

氏 名 松平 尚也

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 カリフォルニア州サンタクルーズ郡サンタクルーズ市 (国名 米国)
2. 研究課題名(和文) : 米国の有機農業とアグロエコロジー～小農研究の視点からの考察
3. 派遣期間：令和3年9月8日 ～ 令和4年6月7日 (270日間)
4. 派遣先機関名・部局名：Department of Environmental Studies ,Center for Agroecology and Sustainable Food Systems ,University of California, Santa Cruz (UCSC)
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況

本研究計画では、歴史的に持続可能な農業が展開されてきた地域である米国・カリフォルニア州の有機農業とアグロエコロジーの達成・限界点に焦点を当て分析し日本の持続可能な農業の方向性を検討することを目指した。

渡米した2021年9月、研究計画遂行環境(研究室取得・移動手段確保)を整備したが、新型コロナの影響で研究計画の一つであった派遣先大学関係者や農家への対面での聞き取りは困難な状況であった。そのため聞き取りの計画を後回しにし、最初は受け入れ教員の農場での土壌調査や、関連団体のイベントへの参加、文献整理作業を行った。2022年1月も新型コロナの感染が急拡大したため、派遣先大学の授業に参加し研究計画の深化を目指した。また研究内容に関連するオンライン会議に参加し現地の有機農業等の状況把握に努めた。参加した会議は、カリフォルニアの団体主催の次の2つであり、小規模・家族農家や有機・持続可能な農業を議論する歴史的な会議だ。CAFF

(Community Alliance with Family Farmers) 主催の第34回California Small Farm Conference : 2022年2月27日～3月3日、EcoFarm Conference : 2022年3月9日～18日。また会議後に開催された複数回の農場訪問にも参加し人的ネットワーク形成に努めた。

3月下旬からは、新型コロナの感染が少し収束したこともあり、研究内容であった有機農家への対面での聞き取り、受け入れ先のUCSCのアグロエコロジーセンター(Center for Agroecology)の農場の作業に参加し研究計画遂行に邁進した。受入教員の紹介でアグロエコロジー研究の世界的な中心地である同センターの会議にも出席し、その歴史と実践から大きな学びを得たことは本研究の大きな課題である日本の持続可能な農業の今後の方向性の検討においても極めて意義深い研究経験となった。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性

本研究の成果の一部を使用して渡米中に以下の2つの発表を行った（報告においてJSPSの若手研究者海外挑戦プログラムの支援によることを明記）。

1, 松平尚也「新型コロナ後の日米欧の持続可能な農業をめぐる課題～そのパブリックコメントプロセスの新自由主義的イノベーションと持続可能な本来農業の視点からの検討～」『第22回日本有機農業学会大会・個別報告』2021年12月5日、於：茨城大学（オンライン）

2, 松平尚也「新型コロナ以降の世界の食と農と家族農業、日本の食と農の未来」『家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン連続講座第11回』2022年2月18日（オンライン）

1の日本有機農業学会の個別報告では、日本の持続可能な農業政策を方向付けるみどりの食料システム戦略と欧米の持続可能な農業を比較して発表した。発表では、派遣先の関係団体の意見も取り上げた。2の講座での報告では、カリフォルニアの有機農業事情を報告し日本の持続可能な農業への示唆を着眼点として発表を行い好評を得た（約50名が参加）。

今後の研究計画の方向性としては、現地調査をまとめ米国の有機農業を始めとする持続可能な農業政策の分析を行うことを目指す。中でも米国の大学教育で展開されているアグロエコロジーの展開過程に注目して日本の学会での発表を検討している。

またもう一つの研究テーマであった米国の小農・家族農業に関して、日本の同テーマに関する研究論文執筆にとりかかっており、米国での研究を生かして投稿する予定である。さらに受け入れ教員が行っているアグロエコロジーの出版計画における翻訳作業にも関わらせていただいております、継続した研究に発展させて行く予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと

米国の有機農業やアグロエコロジーを始めとした持続可能な農業の歴史的・系譜的展開過程を研究・実践の視点から学べたことは今後の研究生活にとって大きな財産となるといえる。米国では、実践と研究が相互作用しながら展開しており、日本でもこうした関係の必要性を痛感した。またUCSCの研究者とのつながりも強化され、今後の国際的な研究展開を考える上でも大変有意義であった。

何より得難い研究経験となったのは、受入教員の調査や農家への聞き取りとフィールドワークを通じて現地の農業現場を実体験できたことだ。そこでは、農家だけではなく、研究者や行政関係者も関わり上述した実践と研究の相互作用が生み出されている。

さらにUCSCのアグロエコロジーセンターは、広大な農場を大学キャンパス内に確保し、農業現場に寄与することを想定しセンターが運営し作物の栽培と販売を実践しており、日本でもこうした取り組みの必要性を感じた。

特筆すべきは、持続可能な農業研究に対する多様な政策メニューが存在することだ。その背景には常に研究領域拡張のために関係者がその地盤を確保してきた歴史的な努力と実践があったことを学んだ。こうした研究の民主的な方向性にも大いに学びたいものである。